

旧第一銀行熊本支店社屋に関する研究(1)

平面・立面・構造について

正会員 伊藤重剛¹⁾ ○松本隆之²⁾準会員 曾宮健一³⁾

1. はじめに

熊本市の旧城下町である中唐人町に建てられている旧第一銀行熊本支店社屋は、1919年(大正8年)5月に建設された建物である。レンガと鉄筋コンクリートを用いた構造は、当時の熊本では最新の建物であり、「日本近代建築総覧」¹⁾にも記載されており、アーチを用いたその外観は長く熊本市民に親しまれてきた。その後地元の熊本中央信用金庫(以下、中央信金と呼ぶ)に所有が移ったが、平成8年に売却され、熊本の歴史的建築物としての保存活用が問題となってきた。今回、この建物の保存問題を機に実測調査を行なったので、本稿および次稿に報告する。調査は以下の方針に基づいて行なわれた。

- (1) 平面・立面・断面の基本図面を作成し、現在の状況を正確に把握する。
- (2) 調査結果を元に現在の状況と、施工時および設計案²⁾の相違点を分析する。
- (3) この建物の設計者や時代背景、熊本の近代建築における位置付け等を考察し、旧第一銀行熊本支店の建築史的な位置付けをおこなう。

実測に基づいて収集されたデータは、野帳と写真を元にしてApple社製コンピュータMacintoshで製図用ソフトMiniCAD6.0.3 J2 PPCを使用し図面化した。

2. 平面(図1、図2、図5)

1階は、建設時から、熊本中央信用金庫社屋として使用された1995年10月まで、主に営業室として使われた。付属棟を除く1階の平面は内法寸法で東西方向に20.097m、南北方向に15.602mの矩形である。

入口は南側と東側にあり、ともに風除室が設けられている。南側風除室の西側扉がキャッシュコーナーへの動線として計画されている。

営業室の間仕切り壁は、中央信金として営業されていた時代に、明らかに広過ぎる営業室を仕切るために設けられたようだ。営業室には執務空間と顧客の待合室を隔てるカウンターが現存するが、天板や外側の改変されているものの、位置と形状はほとんど当初か

らのものと考えられる。営業室西側には付属棟への連絡用通路が付けられている。

営業室の北側には、西側から、金庫室・支配人室・応接室が配置されている。また、営業室の南西側にも仕切り壁で仕切られただけの応接室がある。金庫室は頑丈な鉄製の扉と、最大厚さ62.3cmのコンクリートの壁で囲まれ、強固な造りとなっている。金庫室内部には作り付けの棚があり、鉄格子で3つに間仕切られている。階段室は、北東と北西の隅に二箇所配置されており、北西の階段室は1階と2階を、北東の階段室は地階・1階・2階・屋上を螺旋階段で連結している。2本の円柱と三本の角柱は1階平面を特徴づけると同時に、この建物の主要な構造体の一部ともなっている。

開口部は、南側に6ヶ所、東側に4ヶ所、北側に5ヶ所設けられている。南側と東側の窓には外側にシャッターが、北側の窓には鉄格子が付設されている。

2階平面の特徴は、1階営業室上部の吹き抜けと、それを取り囲む廻廊で構成される空間である。しかし中央信金時代の1階間仕切り壁の増築に伴い、営業室上部には回廊のレベルに屋根裏から天井が吊られている。2階平面は、この吹き抜けの空間と、その北側に配置される金庫室、3つの室、そして2つの階段室で構成される。室1には3つの扉がありそれぞれの扉から独立した3つのバルコニーに出ることが可能となっている。現在、室2と北東階段室は壁で間仕切られているが、独立した空間の確保を目的とした後の増築と考えられる。また南側の部屋にも増築による仕切り壁がある。西側の壁には付属棟2階との連絡通路が設けられているが、扉は現在開閉不可能となっている。外部開口部は1階と対応して配置されており、1階と同様に南側・東側開口部は外側にシャッターが設けられ、北側の窓も1階同様鉄格子が設けられている。バルコニーの扉には、内側に鉄格子が設けられている。

屋上には3つの塔屋と煙突が計画されているが、階段室としての機能を果たしているのは、北東塔屋のみで、残りの2つは通りに面した建物の景観を意識した

1) 熊本大学助教授・工博 2) 熊本大学大学院生 3) 同学生

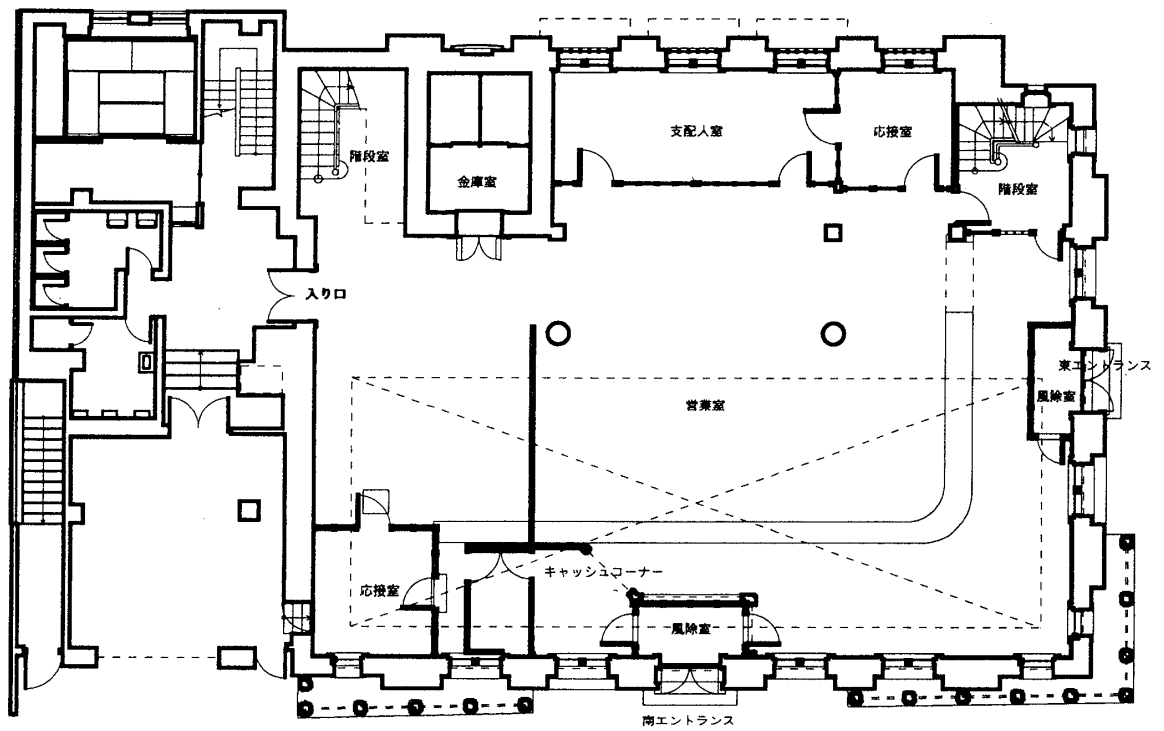


図1 1階平面図

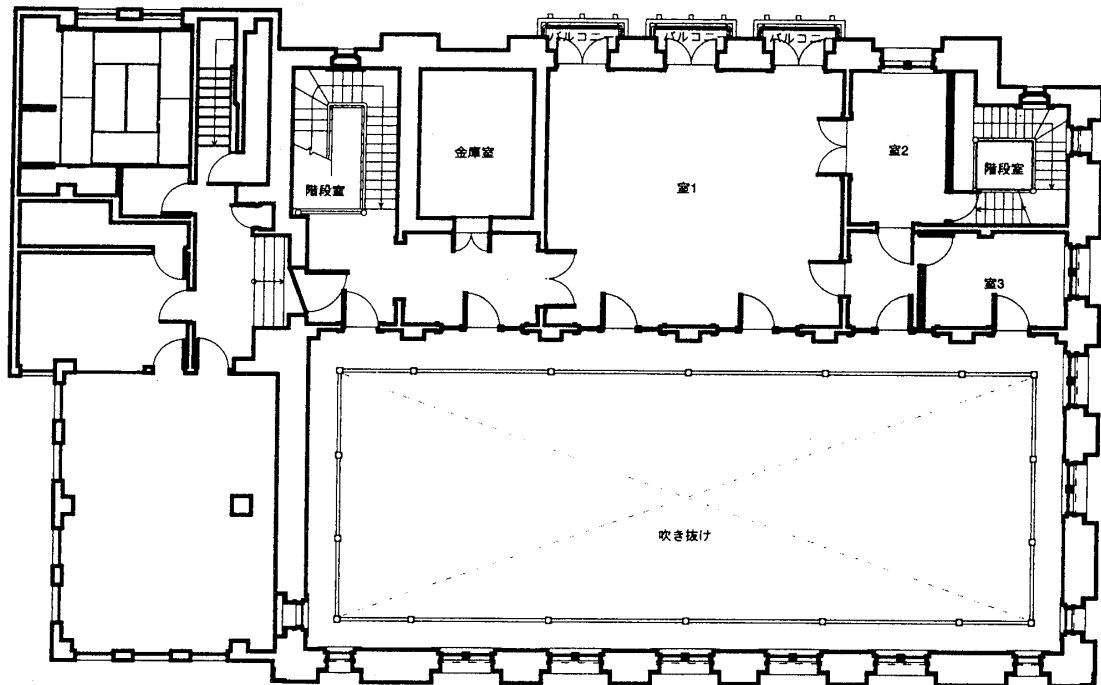
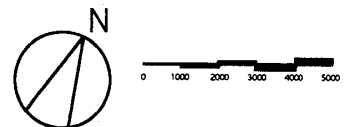


図2 2階平面図



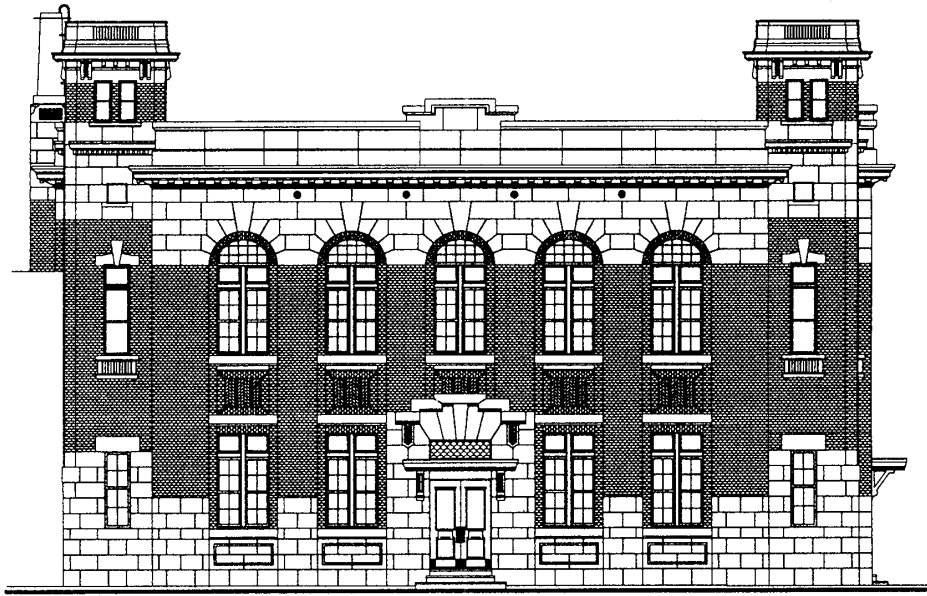


図3 南東側立面図



図4 南北断面図

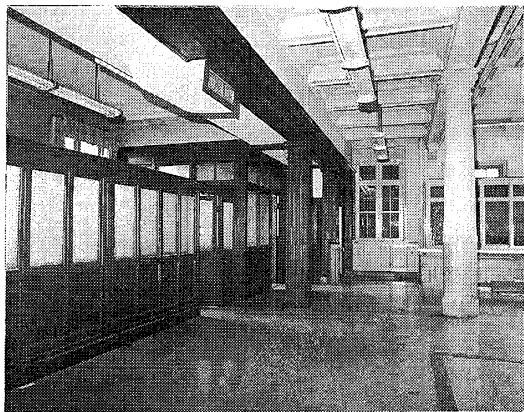
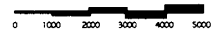


図5 1階内部写真

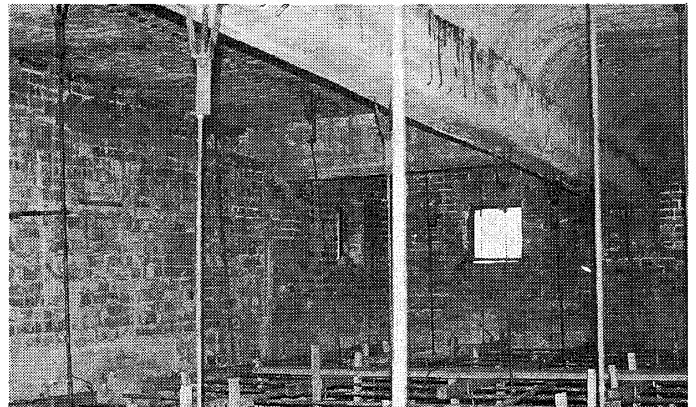


図6 天井裏南東部写真

単純に装飾を目的としている。煙突は屋上の西側にあり、パラベットと躯体を共有している。この煙突は地下焼却炉の排煙を目的としている。屋上西側、煙突の南方には梯子が設置されており、付属棟屋上との連絡が可能となっている。

地下は4つの室から構成される。西側には、付属棟地階との連絡通路があり、地上階との連絡は、付属棟階段と北東側螺旋階段によって計画されているが、現在後者の扉は開閉不可能になっている。調査によると、地下の4本の角柱のうち3本は1階の角柱に対応していることが判明した。また、北側に6ヶ所、開口部の形跡が見られたが、現在はコンクリートで塗り込められ、無採光状態となっている。木製の柵が数多く残されていることから、倉庫であったと判断できる。

3. 立面 (図3)

旧第一銀行熊本支店の南側ファサードは、大正時代最も賑わった唐人町筋に面しており、通りからの景観を充分意識したものである。南側ファサードは高さ12.402m、入口・5連のアーチ・軒・パラベットを含む中央部は東西長さ16.392m、それより0.343 mセットバックした隅部を含む長さは21.537mである。東西上端部の塔屋は、同仕様で、横3.408m、パラベットからの高さ2.655mである。開口部の上方には左官仕上げによる装飾がなされている。5連のアーチは、1階部分と2階部分が窓となっており、中央アーチのみ1階部分が入口となっている。それぞれのアーチ間の上部には小屋裏の通気口も見られる。ファサード全体は、下部が灰色の花崗岩、中間が化粧釉薬レンガ、上部がコンクリート洗い出しである。1階と2階の開口部の間にはタイルパターンによる装飾も施されている。

東側ファサードは、坪井川に架かる明十橋が渡す道路に面している。ファサード構成要素は南側と同様だが、塔屋を除く高さ12.402m、長さは中央部が南北方向10.933m、それより0.34 mセットバックした隅部を入れると南北方向15.699mである。東側の場合アーチは3連になっている。

北側ファサードは坪井川に面している。北側のファサードは、地階部分がルスティカ仕上げになって荒々しい表現になっているところに、南側との大きな相違

点が見られる。土台から塔屋下端までの高さは15.055mである。基本的には南側と同様だが、特筆すべき相違点は、5連のアーチのうち中央3つのアーチでは、2階部分にバルコニー及び扉が見られること、階段室と金庫室の機能的制約がファサード開口部のデザインに反映されていること、アーチ上部の軒が西側ファサードまで連続していること、北側ファサードの西側には塔屋がないことが挙げられる。

4. 構造について (図6)

旧第一銀行熊本支店社屋の構造に関しては、熊本で最初の鉄筋コンクリート構造として記述されているものが大半を占めるが、完全な鉄筋コンクリート構造ではなく、煉瓦造と鉄筋コンクリート造の混構造と考えられる。建設された明治末期から大正にかけては、煉瓦造から鉄筋コンクリート造への過渡期であったため、旧第一銀行熊本支店社屋は、煉瓦造の一部に鉄筋コンクリート構造が取り入れられた例と言える。

鉄筋コンクリートが用いられた部分は、柱・梁及び梁端部ハンチ・金庫室・階段室・床スラブ・アーチ開口部まぐさ部分・屋根・塔屋である。建物を囲んでいる煉瓦造の壁の最大厚さは86.3cmである。小屋裏には、東西方向1本と南北方向8本の大梁が確認でき、最大スパンは15.608mである。主要な構造体である柱は、中央の円柱、北側の角柱及び地階の柱で、1階円柱間スパンは7.289 mである。円柱には小屋裏の大梁が乗っている。

5. 小結

以上のように、旧第一銀行熊本支店は、一部改変された部分があるものの、現存する当初の設計図と比較して、建物のほとんどは創建当初の姿をとどめている。構造的にも外壁の厚さが厚いところは90cmにも達する頑丈なもので、建物全体として今後の使用にも充分耐えうることが判明した。

注

- 1) 日本建築学会編、「日本近代建築総覧」、1980年
- 2) この建物を設計・施工した清水組(現清水建設)の設計図面が、現在まで保管されており、これと比較した。